

針葉樹会報

1987.11. 第70号



表紙写真説明

常念岳より御岳を望む

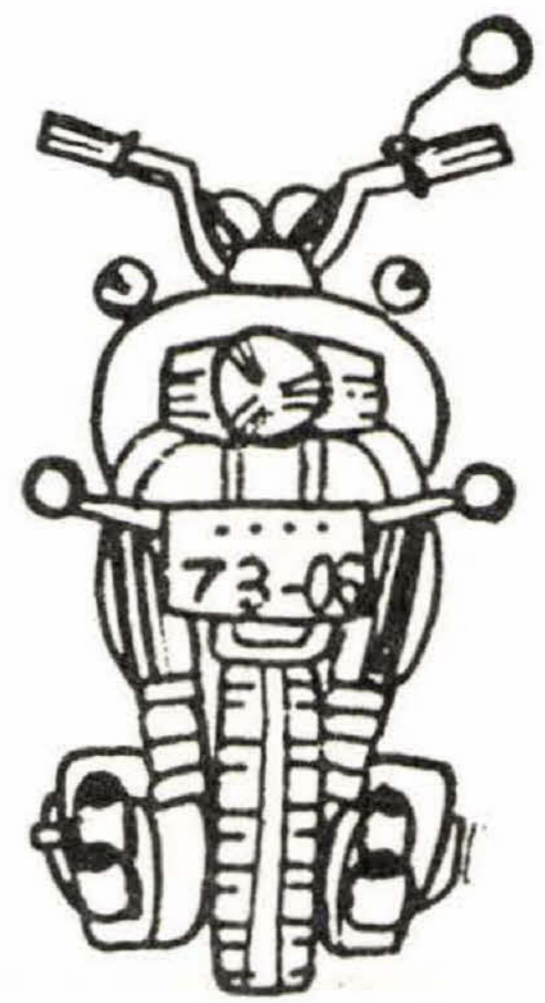
(撮影・山本 健一郎)

<p>発行日 1987年11月24日</p> <p>発行所 針葉樹会</p> <p>印刷所 篠田印刷</p>	<p>針葉樹会報</p> <p>第70号</p>	<p>編集人 〒167 杉並区南荻窪 3-29-23</p> <p>引地 真</p>
--	--------------------------	--



— 目 次 —	
バイクと登山	金子 晴彦…………… 2
書棚から	柿原 謙一…………… 6
「忘れえぬ山の人々」	
中村幸正君追悼山行記	高崎 治郎…………… 7
(乗鞍岳)	
「伊那針葉樹会」	石川 保典…………… 10
山行記	
会務報告	…………… 12
会務連絡先	…………… 15
編集後記	…………… 16

バイクと登山



金子 晴彦

オフロードのバイクに乗るようになって八年になる。免許を取ったのは十五年前、長男が生まれた時。それまでは自動車などには一切無縁だったが、せめてバイク位に乗れなくては男親としてしめしがつかないという気になり、十一月の寒い日に、突然教習所に通い始めた。幸にしてまだバイク免許の排気量制限がゆるく、三五〇CCの教習車による10時間の練習で何無く取得出来た。しかし、その後、免許取得の難度は急速に高まり、一二〇CCのハーレーダビッドソンにも乗れるこの免許は、今や「限定解除」という尊称さえ冠せられる貴重品となっている。

但し、免許はとっても直ちにバイクを買うというわけにはゆかなかった。男親としてしめしがつかないと言っても自分一人で勝手に

乗るようなシロモノは、子供用品第一の新生家庭にとっては全くの不用不急品であり、予算折衝の案件にすらならなかったのである。

従って、まずは田舎ではこりをかぶっていたホンダスーパーカブ七五CCを送ってもらって乗り回すことになった。さすが当初は気がひけて家の回りをウロチョロしていたが、次第に大胆になり、いつか相模川を越え、鶴巻温泉にいたり、秦野盆地に入り、遂にはヤビツ峠をうかがうまでになった。そして、ある夏の一日、一挙にヤビツ峠を越え、札掛、宮ヶ瀬と周り伊勢原に戻る東丹沢トライアングルコースを無事走破してしまった。さすが世界のホンダだった。以来、「カブで丹沢」がやみつきになってしまった。

大学一年の冬、一年生ばかり四人でキウハ

沢を遡り、丹沢山、蛭ヶ岳、松洞丸、大室山、蛙ヶ丸を経て山中湖にいたる計画をたてた。

ところが遡行を始めて程なく、F3の第二の滝の上で沢を渡ろうとしてNが氷混じりの水中に転落。ほうほうの体で退却した。再度登ってみたいと思っていたが、アプローチが長いのでその後行ったことが無かった。ところが、カブに乗れば、エンジンは相当苦しそうではあるものの、たった一日で往復出来るのである。二つの大岩にはさまれた問題のF3は、小さなこの沢のいわば門のようなもので、その構えは実に見事なものだった。幾度か通って、暗い谷に太陽の光が一瞬届いた瞬間を捕えF3を撮影することが出来た。カブあればこそである。

ところが、そんな風にカブを酷使している内に事故がおこった。秋の紅葉を眺めて下り始めたところ、前輪がはねた小さな石がエンジンルームの外壁に激突し、壁に穴があき、エンジンがストップしてしまったのである。山奥だけに人が来るわけでもなく万事休す。以来四時間、麓の自動車修理工場まで悪戦苦闘の下山を強いられることとなった。

これで当面バイク登山は諦めざるを得なかった。

七年後、つまり八年前の二月、チトラルの紀行文を書いたところ生まれて初めて賞金なるものをもらった。これなら勝手に使ったっていいだろうということで、直ちに上野のバイクショップに出かけ、性能も、整備状態も確かめもしないままに一二五CCの中古のオフロードのオートバイを買い込んだ。七年も待たされたせいで判断能力などはゼロだった。上野から戸塚まで1号線を帰るのに、信号のたびにエンジンが止まって大苦勞をしたが、それでもカブに比べれば格段のスピード、足回りというわけで大満足だった。気が付けばスピードメーターもこわれている有様で、実は、かの有名な上野の悪徳商法にテッキリだまされたわけだが気にもならなかった。

その週末から走り始め、東丹沢に限定されていたかつての行動範囲は西丹沢まで広がり、今度は小川谷廊下、ユーシン等が目的地となるようになった。メカ音痴でも油をさして、磨いている内に少しは調子も上がってきた。「限解」の意味は何と七年目にしてようやく

発揮され始めたのである。そして春になると甲州街道を西にとり、長駆、甲斐駒の麓、長坂へと向かうことになった。これまた因縁の山とも言えるこの山へは実は幾度も登った。しかし、麓の事情とか、麓から見上げる山の姿とかについては何も知らなかった。学生時代は山に登るのが精一杯で、とても麓をめぐる余裕などは無かったのだ。春、夏、秋、冬と思うさま駆け回り、甲斐駒を見はるかすに格好な位置をいくつも見付けた。怪異なセムシのような山は見る位置を変えるたびに大きく姿を変え、最終的にはフォッサマグナの上の寒村、清春村の外れの開拓地からの姿が何よりも甲斐駒らしいとの結論に達した。冬、早朝四時に家を出ると丁度モルゲンルートに輝く駒の姿に接することが出来る。トウモロコシの根っこが積み上げられた開拓地の凍土の上で震えながら日の出を待つのは実に豊かな時間だった。

こうした折りに、針葉樹会の懇親山行を駒の北の山、日向山に設定したのは会員諸氏にバイク姿をお見せしたいというのが本音だった。ところが、この山行にもう一人のライダー

が参加した。若手会員の佐藤活朗君である。ぼくよりは五分遅く免許をとり、従って、「限定解除」ではない一級下の免許でしかないのだが、バイクはホンダXL二五〇と称する、当時としては最新鋭の本格的オフロードバイクでの登場だった。

それは、一言で言えば「赤い駿馬」だった。車輪がとにかく大きい。それを被う泥よけが車輪から思いきり離れた高い位置にある。従っていかにも脚が長いという感じがある。そしてキュツと絞ったような真っ赤なタンク。左右に大きく張り出したハンドル。これからすればカブなんて亀だ。佐藤君に頼みこんで試乗させてもらおうとクラッチとアクセルのみ合いがもう心がとけてしまう程になめらかである。これからすれば一二五などは機械ではなく寄木細工だ。そして走ってみるとそのパワーとスピードは空恐ろしい程だ。ぼくはもう完全にほれこんでしまった。「限解」をとって以来早くも十二年。ようやくにして理想のマシンと出合うことになったのである。

日向山へは会員諸氏を尻目に佐藤君と尾白川林道を駆け登り、通常登山口より更に奥の

登山口からわずか一時間で登頂、遅れて登って来た皆さんに実にうさんくさい目でみられてしまった。

帰京すると早速XLに関する情報を集めた。バイク屋に行って値段の交渉もしてみた。しかし、大手をふって購入出来る資金はやはり無かった。次第にストレスがたまってきた。

そうこうする内に佐藤君が結婚し、ワシントンへ転勤するという噂が伝わってきた。すぐさま考えたのはXLのことだ。まさか持つてゆくわけはあるまい。ならば買い叩けるのではなからうか。しばらく様子を見てから、「XLはどうするんだい」と聞くと「困っているんですよ」と来た。「引き取ってもいいよ」「えっ、それは有難い」実に、全く、予め仕組まれていたかのようにチャンスがおとずれた。結婚式の受付にやや部厚い御祝儀袋を渡して夢のXLはぼくのものになった。

走行距離は未だ三八〇〇キロメートル。新車と言っても良かった。引渡しを受けて帰る道すがら雨が降り始めたが、出会いからわずか半年で恋人を我物にした喜びで雨も又楽しかった。

かくて、ぼくの「本格的バイクライフ」がようやくにしてスタートすることになった。

二五〇CCあるので高速も走れる。スピードは一二〇キロも出る。どんな悪路でもバリバリと進める。三十五歳を過ぎて始まったバイク狂いは相当病的なものになる予兆に満ちていた。

XLを手にして第一に手がけたのはカブと一二五で走ったルートの再走だった。エンジンの下にはしっかりガードがついているのでキウハ沢へは何の不安も無く入れた。そこから宮ヶ瀬に出て北上し、道志川沿いに西へ向かい、両国橋から犬越路を越え、中川温泉を経て松田に至る丹沢一周もわずか一日で出来るようになった。

尾白川林道をどんづまりまでゆき、そこから尾白川に降りて、黄蓮谷の出合まで往復するのもたった一日だ。

次いで、新たな山々が加わり始めた。野呂川林道を走り、広河原から北岳を往復する。大弛峠まで走り、国師岳を往復する。穂高を見なければ、常念岳の東側にある林道をつめ、翌日、常念、蝶と周遊する（誠に忙しいこと

は忙しいが、たった一日で山の気を吸うことが出来る）。

しかし、その内に何か物足りない気がし始めた。ひとつはバイクを下においてあるために往復ルートしかとれないことだ。歩き通して全く違うところに至って終るということは精神的に非常な満足を与えるようだ。ふたつには仲間がいないことである。バイクと登山はそもそもは相反するようで、これが結びつく人間はひどく少ないのである。

そこで止むなく社内に目を転ずると、結構身近にバイク狂とも言える人間達がいることが分かった。普段は小むつかしい顔をしているのに、休日となるとピカピカに磨いた七五〇CCのオートバイに乗って子供のよう喜んで連中である。それに声をかけて、なるべく山方向へと誘い出す算段を始めた。七人ばかりが集まり、平均年齢がちょうど四十七歳だったところから、オジンばかり「オジンバ」と名付けて二ヶ月に一度のペースで郊外を走り回ることになった。メンバーのマシンはバイクマニアだけに超一級品だった。七五〇CCは当然で、BMWやハーレーダビツ

ドソンまでである。絶品と思っていたXLが実はバイクの世界では実にマイナーな外れ者であることを知らされた。

それでも発起人ということで企画部長を命じられ毎回のツーリングルートを検討していたが三度ばかり出かけたあと、誰言うともなく「北海道を走りたい」ということになった。土曜一日かけて郊外を走ってはみるが所詮は都会の臭いがぬけず、大地そのものとの一体感がどうも今ひとつ感じられない。それをかなえてくれるのは北海道なのではないかというわけである。

北海道までは遠すぎて地上を走るわけにはゆかないとなるとフェリーで苫小牧に行く方法がある。しかし、航空会社の貨物事業の企画を担当しているぼくとしては「待てよ」と考えた。旅客とバイクを飛行機と一緒に運んでしまえば良いではないか。かくて、仕事とも遊びともつかない企画検討が開始された。羽田から札幌へ飛ぶジャンボ機の床下の貨物室には約二〇トンの貨物が搭載できる。搭載方法はコンテナと呼ぶ箱に貨物を入れる場合と、パレットと呼ぶ板に貨物を積付ける場合

と二通りある。パレットの場合は一枚におよそ四台のバイクを積付けることが出来る。但し、着陸の際の重力に耐え、かつ、積付けがし易いように補助具を開発しなければならぬ。簡単に考えていたシステムは意外に複雑で、結局検討メンバーは十人を越えた。

名付けてJALバイクプラン。デビューの前にオジンバはモニターツアーの権利を得て北海道へ飛ぶことになり、千歳↓襟裳岬↓帯広↓阿寒湖↓層雲峡↓富良野↓千歳を結ぶ一四〇〇キロメートルを三泊四日で走破した。一直線に続く道を十キロ、二十キロと走るにつれ、道をめぐる土地の個性がバイクの上の体に次々にぶつかってくる。ハンドルを切り、スロットルを調節しながらこの力に立ち向かっていると、視覚というよりは、むしろ全体が土地を感じ、土地の個性は、一種の肉感として無言の内に体の中にたまってゆく。「風になる」、「海に染まる」。バイクの醍醐味を伝える様々なキャッチフレーズはこの一体感をこそ指している。新しい土地を訪ねたいと思うのは、土地との一体感を通じた肉体の増殖を実感する快感を求めてのことだ。そうだと

すれば、一体感との間につぶさな視覚を前提とした知識や、言葉といったものの入り込む余地の少ないそれだけに、純粹な体験を保証してくれるバイクによる疾駆という手段は新しい土地には何よりふさわしい。

千島海流からあふれ出した霧が襟裳岬の東海岸に延々と広がる百人浜をおそう。その彼方に日高山脈末端の豊似岳がゆったりとした姿を見せている。直線にしては二〇キロメートル、六月だというのにふるえる程の寒気をおして一気に走る。何度目かの北海道行で初めて、北の大地を直に感じた一瞬である。

この商品はいける。ぼくらはそう確信をもった。そして、期待にたがわず、バイクプランはその夏のヒット商品となり二千台のバイクが空を飛び、北海道を走った。

その後、同様バイクプランを九州に展開するため、鹿児島から西海岸沿いに福岡まで七五〇キロメートルを走った。北海道と比べて土地の豊かさが際立っていた。

こうして、山行の足として出発したぼくのバイク行は、ついにバイクと飛行機という、時代の先端をゆく二つのマシンを結びつける、

実にハイテックな段階へ到達することとなったのである。現在は冬も走れる沖縄への展開を検討している。

最近、ふと懐かしくなって丹沢キウハ沢に入ってみた。ところが一帯では宮ヶ瀬ダム工事が始まり、F3は両側の大岩ごと破壊されて巨大な堰堤となり、影も形も無くなっていった。そして、甲斐駒を見はるかす開拓地は何とゴルフコースとなり、ぼくの撮影した同じアングルからの写真が、立派なパンフレットの中では「九番ホールからの南アルプスの山波」となっていた。足を遠去けて思い出の中にのこしておけば知ることもない変化ではあるが、行動力のあるバイクならではの皮肉な情報量である。

XLも一万六〇〇〇キロメートルを越えてややガタがきた。しかし、セルも無い単気筒のシンプルさは故障知らずで、はきこまれた山靴のような親しみが増してきている。カーブを回る時、フットステップに全体重をかけて全速で走れるようになった。家を出て目的地へ、そこから更に次の目的地へ点から点へまるで自在にワープするような陶酔を覚える

ようになった。そして休日の渋滞を横からかわすといういいじましくも切実な効用も加わって、バイクは益々手離せそうもない。おそ咲

きの恋はやはり相当重症である。

願わくは針葉樹会員諸氏と本格的なバイク登山を実現したいものである。

書棚から

忘れえぬ山の人びと

望月達夫著

柿原 謙一

この新刊を望月さんから恵贈されて、私は興味深く、また一橋大岳部時代の今は亡き友の顔を回想しつつ、読みおわたたのである。興味深かったのは、日本山岳会の大先輩たちについての叙述のところであり、悲しい回想にひたつたのは、針葉樹会員の中川孫一・村尾金一・小谷部全助・森川真三郎・大塚武各位についての叙述からであった。

著者の山友は巾広いのであり、日本山岳会の大先輩をふくむこの新刊の書評を書くのは、私の柄ではない。しかし針葉樹会員の叙述は、私とともに山に登った山友なので、私にとっても忘れえない人たちである。その思いにかられると私は、この新刊は針葉樹会員の方にも、また一橋山岳部員の方にも、読んでいた

だきたいなと思う。

中川先輩に最後にお目にかかったのは、遭難される少しまえ、銀座松屋の地図売場だった。「おや、地図売場でとはねえ」と笑われた背広姿の中川さん。村尾さんにお目にかかった最後は、築地の病棟であつたが、岩崎さんと二人で病室をたち去るときの村尾さんのお顔が、忘れられないのである。

小谷部・森川・大塚三氏については、本会々報64号に私は、「東京商大一橋山岳部の昭和11年前後」を書いているので、重複はさけないが、山岳部登山の転形期に身をもつて範を示した人たちであり、その系譜は今の山岳部の行動につづいたのである。

本書には写真も多く、忘れえぬ人びとの顔がある。巻末の章「山の本の思い出」も良きエッセイだと思つたが、巻尾に人名索引を付けたことは、新刊の価値を高めてくれた。これからの発行は、こうであつてほしい。

(一九八六年八月、茗溪堂刊、二〇五ページ、写真八ページ、索引五ページ、定価一九〇〇円)

中村幸正君追悼山行記

乗鞍岳

高崎 治郎

通称Y中が肝臓癌で急逝したのは昨年暮

近く十一月三十日であった。初盆に甘利、石和田と墓参りした時に、奥さんから彼は生前遺骨は海か山に撒いてくれと言っていたと聞いて、甘利の提案でY中の最初の冬山合宿のゆかりの山、乗鞍岳に御家族とオーション会前後のOBで一緒に行こうということになった。

十月三日(土)国立の一橋大学校門前に九時集合。十五分前に着くと、吉沢、柿原、佐々木大先輩が登山姿でステッキを持って校門前を散策しておられる。可さんの奥さんの姿も見える。中国より一時帰国中の横山さんも参加予定であったが、九時半にやっと伊豆山荘の本人と連絡が付き不参加が判明したので、中村家と昭三十年の三人組を除く十六名でミ

ニバスに乗り込んで出発した。

中央高速から眺められる奥秩父連山、八ツ岳、南アルプス連峰は、台風一過後の秋晴れの下、いつもよりくっきりと近くに見える。

車内では、山本のモルト古酒、佐難のバーボンで酒宴が始まると倉知は最年少の為サービースに務める。昼食は高速を岡谷で下りて、甘利の案内でミニバスがやっと通れるほどの狭い田の畦道を行ったところにあるうまい手打そばを食べたが、今度行っても探し出せまい。

午後三時過ぎ、乗鞍山麓の木立山荘にバス到着。看板が道路から見えないので少し行き過ぎてから引き返す。二階は十部屋位あり、一階も広い食堂があり思ったより大きなリッパな山荘である。主はOBの中村賛治(昭23卒、昭36事故死)さんの弟の礼治さんで商売

気が無く居心地良い。少し離れた木立の中にプレハブが建ち、中村為治、元一橋教授が独りで住んでおられるので先輩達のうしろについて伺った。部屋の中程にベッドがあり、坐机、畳の上には分厚い本が山積し、壁には自筆の裸婦の油絵が掛っていたが、机の前に端然と坐っておられる白い長い顎髭ゴキヒを蓄えた細面の先生は、さながら仙人のようであった。

却って英語を教わった石井会長が「先生時間をどのようにお使いですか」と質問したら、「君、時間が足りないんだ。今、ヘロドトスヘロドトスを訳しているんだ」との返事に、九十歳になっても、なおカクシヤクとしておられる先生の健康の源泉が、ギリシヤ哲学への情熱にあるのではないかと感嘆した。昨年はスピノザを訳しておられた由。

吉沢先輩が「歳ばかりとってこんなになりましたが……」と挨拶されたが、帰り際に中村先生は「どうぞ御大事に御元気で」と吉沢先輩を逆に励まされる言葉をかけられたのは、全く参ったと感心して辞去した。炊事や、身の廻りの世話は御自身でなされるようでしたので、百歳の長寿も夢ではないと思った。

夕暮れ近くY中夫人、息子二人が車で到着。早く着き過ぎたので山頂近くまで車で行って、稜線へ出たが風が強くて寒いので帰って来たとの事。

石原、奥野氏の車は、小屋が見つけれなかったと暗くなってから到着。大阪から来た白川氏は三十年ぶりに会う人が多く、甘利達に「貴方は誰方ですか」と聞く始末で、聞かれた方は皆ガツクリ、大笑い。

硫黄の匂いのする戸外の岩風呂温泉には木の葉が浮び趣きがあり、風呂から上った後々まで体が温まった良い湯であった。

夜は、借り切った山荘の食堂で、Y中君を追悼したが、彼は昭和三十二年、中村保（T中）と滝谷グレポンの初登攀を、現地で偶々一緒になった芳野満彦と三人で成功しているが（詳細は針葉樹会報第68号）、これは、一橋山岳部にとって戦後の夏期初登攀で誇りに出来るものであった。諸先輩や可さんの奥さんの健康を祈念して酒宴が賑やかに開かれ、夜が深まると共に、安曇節や、昔の山の唄を歌い、最後は山讃賦の合唱で締めた。

翌四日朝はゆっくり七時起床と申し合わせ

たのに、30年組の三人が、四時半頃から起き出して一階のストーブの前で酒盛りを再開し、時折聞えて来る高笑に眠れなかったが、遠足の前の幼稚園生のようなものと締める。

八時過ぎにバスで山荘出発、高度が上がる毎に落葉樹が色付き初め、上に近づくにつれて燃えるような紅葉に、嘆声が出れる。

車の行ける最高度の終点の畳平は、車が混んで、長く車を置いておけないかもしれないという事で、肩の小屋の真下の大雪溪の下の細長い駐車場で全員下車。吉沢さん、太田夫人、奥野氏は甘利がY中家の車で近隣を案内して、一時までに戻ってくる事にして、他の十九名は九時半に、大雪溪あとに取つく。約半時間で、肩の小屋に到着。途中の残雪上で、スキーを滑っているのが見られた。

小休止後、尾根伝いに一時間で、十一時前に全員頂上に立った。Y中夫人は初めての三千メートル級の山登りであったが、息を切らし乍らも良く頑張られた。最年長の柿原さんはちょうど五十年前の一年生の各合宿の乗鞍を思い出して懐かしんでおられた。

頂上の三百六十度の眺望は、雲もなく空気

が澄んでいるので、北は剣や白馬への縦走路の山波や、日本海側の白山、木曾駒、御岳の中央アルプス、更に南の甲斐駒、北岳から塩見、赤石への連山、八岳等いつまでも見飽きなかったが、山頂近くで、皆おにぎりや梨を食べた。

中村正司画伯は途中の稜線上でスケッチを初め、リッパな山が多過ぎると言い乍ら、数枚を描き上げていた。

Y中ご子息の岳夫、潔両君が、親父の親指ほどの小さな遺骨を石で砕き、頂上から二、三十メートル降りた岩峰の上に立ってY中の生まれ故郷の高崎市に向けて投げると、折から吹いて来た風に舞って、空中に消えて行った。その瞬間、「ヤッホー、ワイナカー」と大声で怒鳴ったが、エコーは返って来なかった。何か空しく胸にジーンと迫るものを感じ、眼頭が熱くなった。「馬鹿野郎、早く逝きやがって」と独りつぶやいた。奴は全く善い奴だった。人の面倒見が良くて、どれだけの人が彼の世話になった事だろう。日航機事故の時のクラスメートの河口君の遺体収容や、同期の尾身幸次君が衆議院立候補初当選の時の選挙

運動等々、地元とはいえ仲々出来るものではないと思う。

彼の盛大な葬儀が彼の人柄を良く物語っている。彼は又、人付き合いが良く、針葉樹会やクラス会、学年会等々、彼の出ない会合は皆無と言えた。彼が人の悪口を言った事を聞いた事が無く、周りの人々全てに好かれた。

学生時代の彼は健脚で鳴らし、地下足袋を履いて尾根道を歩く姿は韋駄天の如く駆け行くので追いつけなかったが、彼の人生も太く短く駆け抜けて逝ってしまった感じだ。

肝臓癌が発見された時は、進行し過ぎて手術も出来ない状態であった由、本人に癌を知らせる事なく、入院後僅か半月で家族に温く見守られ乍ら、静かに息をひきとった彼は、最期の痛みもなく、幸せな、しかも我儘な人生を送ったと言えるのではなからうか？

併し、奥さんはY中につき合って以来、大変だったであろうと想像に難くないが、息子さん達は母親想いのやさしい心根のリッパな若者に育っておられる。

山頂からの下りは以外と早く、バスのところには一時前に着いた。山荘に戻り、中村家、

石原氏等の車とバスに分かれて帰途につく。

吉沢、柿原先輩はこのまま帰るのは勿体ないと更に一泊したいと近くの知人の家と上高地へとそれぞれ途中で別れて行かれた。

帰りの中央高速は甲府を過ぎてから混み出したので、トンネルの前の勝沼で降りて、一旦、河口湖方面へ逆方向に走ってから、道志川添いに、中秋の名月を見乍ら遠回りして、蛇行した山道を二時間程走り、京王線高尾駅前で解散した。太田夫人は長時間のバスに酔いもせず、居眠りもされず非常に御元気なので驚いた。最後に、自発的幹事の甘利に感謝すると共に、中村家より多額の御寄附があったので、遭難対策基金に積立てる事にした事を御報告します。

尚、木立山荘がもっと針葉樹会員の皆様に利用されることを御薦めします（電話〇二六三―九三―二五四五 一泊二食付き六、五〇〇円）。

参加者

吉沢一郎、柿原謙一、佐々木誠、久保孝一郎、石井左右平、伊藤恙生、中村正司、石原脩、白川隆夫、奥野巖根、佐難恭、甘利仁朗、高



崎治郎、山本健一郎、柴崎新、岡垣治雄、上原利夫、倉地敬、以上十八名
太田みつ、中村徳子、中村岳夫、中村潔、高崎圭子、計二十三名

「伊那針葉樹会」 山行記

石川 保典

インドヒマラヤのホワイトセールに土方浩、中村宜幸、萬濃英士の三君が消息をたつてはや六年。歳月の流れるのは実に早い。七回忌と聞いて、当時のさまざまな記憶に思い出がまざまざと蘇がえった。ともに山に登った岳人としての息遣いが三君の遺影と重なる。心の片すみにいまもしっかりとあった絆の太い糸は、はるかホワイトセールに向かって伸びていた。紅葉が始まったばかりの九月十九、二十日、中央アルプスのふもと、長野県の駒ヶ根高原に三君をよく知る先輩、後輩十一人が集まりおおいに痛飲、ささやかな登山で冥福を祈った。

駒ヶ根高原は、九月も半ばを過ぎると夕刻には少し肌寒さを覚えるほど。はるか山奥に宝剣岳の頂きが申し分けなさそうにチョココン

と頭を出しているのが見える。東京、関西方面からいち早く到着した神野、引地、小林、宮下、山本、稲毛の部隊は気の早い酒盛り。一帯は旅館、ペンション、別荘が建ち並びリゾート地帯で小林さんは早くも「芸者やコンパニオンはいないのかね」と叫び始める始末。明日の登山が思いやられる。

夕方になり米田、中西、田中、石川、五ヶ山が到着した。夜遅くなるという安島を除き十一人全員が揃った。六時三十分から、二十五人はゆうに入れそうな宴会場で酒宴。大半が浴衣姿でくつろぎながら昔話に花を咲かせた。やはり山の話がもっぱら話題の中心。三君の思い出に話が及んでも終始、しんみりとした様子は微塵もなく、やがて笑いと恐怖の宴会へと移り変わっていった。

追悼文集に「入部当時本当に未熟な人間であつた私をここまで育ててくださった三人の御恩は決して忘れることはできません」と、酒を飲ませていただいた話ばかり綴った、十人の中では一番歳下の五ヶ山君。いつも陽気な彼は山岳部のアイドル。「おーい五ヶ山、奥飛驒慕情歌えや」。いつも三君を笑いころが

せた彼の歌いっぷりは、山岳部の永遠の内部矛盾である。少しも成長していない彼の自慢のど。デフォルメした彼の歌がいつもきっかけになる。次に誰かが歌いだした時、そこはもう修羅場だった。

山岳部の宴会はいつも放送禁止用語と黒塗りの画面でいっぱいだ。畳は酒の海になり、壁や床の間の絵皿に穴があいてしまうわ、あとは推して知るべく。狂乱の嵐の中で一人歌い続けた米田さんの姿は印象に残る一シーンではあつた。最後に部歌山讃譜を高らかに合唱、中西さんの気合いの入った万歳三唱で幕を閉じた。

翌二十日、空は雲一つなく澄みわたった秋晴れ。騒ぎまくったせい意外に二日酔いの人もなくさわやかな表情だった。午前九時、旅館前のバス停からロープウェイの始発駅しらび平に向けて出発した。米田、中西の二人は萬濃氏のレリーフがある青木湖に向かった。千丈敷まで伸びるロープウェイは、東洋一標高が高いという。しらび平駅である事件が起きた。改札の前で順番待ちをしていたころ、けつにしまりのない五ヶ山君が例によつ

てトイレに行き、しばらくして頭をかきかきしながら恥ずかしそうに出てきた。「ドボン」。ズボンのポケットからすり抜けた財布がおつりも届かないはるか奈落の底へ落ちていつてしまったという。

対策を協議する間もなく改札が始まり、やむなく係員に事の顛末を話し、一人残して見切り出発。おそらく前例のない出来事に係員は口をあんぐりあけて言葉に詰まっていた。

「運の尽きとはウンの付くことである。」五ヶ山君の座右の銘だそうだ。

さて、一行八人は十分ほどで標高二、六一二メートルの千丈敷カールに。しきりにこぼれる笑いを押し殺しながら、やはり話題は五ヶ山君のことでもちきり。「先に行っている」と、しらび平に伝言を伝えてもらい、まずカールをバックに記念写真。かわゆい女の子二人連れにパチリと撮ってもらった。この時「チーズ」の代わりに「ドボン」と声を合わせたほど、はや流行語になってしまっていた。陽気な一行は午前十時三十分、木曾駒ヶ岳を目指してスタート。

歩き始めるとやたらにハッスルするのが山

岳部員のくせらしい。肥満ぎみの何人かはすぐに息がゼーゼー。しかし、すぐに写真を撮ってもらった先の二人連れに追いついたところで一本。すかさず引地さんが目鼻だちのきりつとして二十歳ぐらいの一人に「上まで登るんですか」と声を掛けた。返ってきたのは「行きません」というきつい口調のつれない返事。そのあと、「行きません」というものしばらく流^はった。

九十九折りの登山道は、三千メートル級の山々へ手軽に登れるとあってかなり混んでいた。上の方にスカート姿の女の子を見つけては「目標発見」と叫び一目散に駆け上がっていく変な八人は相当奇異に映ったに違いない。

とまれ、小一時間で稜線に出て、まずは標高二、九五六メートルの木曾駒山頂へ。北アルプス連峰や乗鞍岳の素晴らしい眺望を肴に石川の新婚旅行のおみやげ、フランスのワインを一本空けた。フランス産と聞いて「そういえばうまいな」と調子のいいことを言っていたが、値段のラベルを見るやすかさず円に換算「なんや安物やんか」と味の評価もガラリ。あいもかわらず山の中の懲りない面々だ。

冗談を飛ばしあって宝剣岳へ向かった。稲毛、山本、石川、五ヶ山にとってはホワイトセール遭難後の部の建て直しで、冬合宿で苦勞し合ったルートだけに懐かしさもひとしお。鎖場の続く岩稜を登り、頂上で一休みしたあとはそのまま空木岳方面に向かい、極楽平を経て千丈敷に戻った。

約二時間半歩き回り、意気揚々と駅にたど



り着くと、内心では皆心配？していた五ヶ山君が白いビニール袋をぶら下げて一人待っていた。どうやら財布は無事手元に戻ったらしい。遠巻きにして「よかったな」となぐさめる面々。それにしても彼は、長野市くんだりからいったい何をしに来たのだろうか。人なつっこい彼の顔が我々の同情を誘い、心の中でひとしずく涙した。

抱腹絶倒の追悼山行だった。遠くホワイトセールに笑い声がこだましたかもしれない。三君はいまも変わらぬ姿で「あいかわらずだなあ」と見守ってくれていたことだろう。

帰途のバスでは皆なぜか静かだった。もの思いにふけるように車窓に流れる景色を頼りなげに見つめていた。三君の姿が脳裏に浮かんで消えていたのだろうか。来年の再会を約し、午後三時に駒ヶ根高原を後にした。

(註)「伊那針葉樹会」の由来は、電話での予約の際の行き違いか、宿の玄関にかかげられてしまった「一行」のネーミングである。

次回以降の会合でも、この命名を慎んで使わせていただくこととしたい。

会務報告

昭和六二年度総会は六月二四日(水)夕刻より如水会館にて開催されましたが、OB出席者四三名(委任状六九通により成立)及び学生八名の参加を得、盛会となりました。

吉沢一郎氏(昭和四年卒)のご発声による乾杯、および石井左右平会長のご挨拶に続き、早々に審議にはいりました。

当総会にて審議、承認された事項は次の通りです。

一、昭和六一年度 活動報告

(1) 懇親山行

イ、夏の山行(十月)

台風のため、巻機山山行は中止

ロ、春の山行(四月二五日―四月二六日)

奥秩父、金峰山

(2) 会合

イ、評議員会(六月十八日)

ロ、総会(六月二五日)

ハ、忘年会(十二月)

ニ、幹事会(六月十一日)

(3) 出版物

イ、会報(第六七、六八、六九号)

ロ、如水会会報投稿(三月号)

二、昭和六一年度 決算(後表)

三、昭和六二年度 予算(後表)

四、昭和六二年度 役員および幹事

(1) 会長

石井左右平

(2) 副会長

石原 脩

(3) 評議員

岩崎 利一 上原 利夫

根本 大 沢木 一夫

小林 茂雄 中橋 寿雄

樋口 洪 田中 健志

田中 一雄 俵 昭

笠原 広信 西牟田伸一

甘利 仁郎 浅田 充

(4) 幹事

代表幹事 宮武 幸久

総務 岡部 寛史

会計 安島 孝知

会報 山本礼二郎

引地 真

米田 篤裕

山行 宮下 克彦

佐藤 活朗

近藤 泰

学生担当 中西 茂

山本礼二郎

保険 宮下 克彦

(5) 監事 山本健一郎

竹中 彰

(6) 新入会員紹介 白石 彰治

五、昭和六二年度 活動予定

(1) 懇親山行

イ、秋の山行

ロ、冬の山行

(2) 会合

イ、評議会

ロ、総会

ハ、新年会もしくは忘年会

ニ、幹事会

ホ、学生合宿報告会

(3) 出版物

イ、会報

ロ、会員名簿(一九八七年版)

ハ、如水会会報投稿

○ 山岳保険事故通報に

かかる連絡体制について

現在日山協の保険に(希望者のみ)加入しておりますが、保険の適用要件として、①山行計画書の事前提出、②現地警察等への入山届けの提出が義務付けられています。山行計画書の提出先は針葉樹会保険幹事宛となっておりますので、保険幹事、宮下克彦まで事前に手紙等でご連絡下さい。

会員住所変更

横山 皖一 (昭和二七年卒)

留守宅 〒一七五 板橋区赤塚

一―三〇―一九 志村方

鈴木 克彦 (昭和三一年卒)

新住所 〒四六一

名古屋市東区白壁三―一〇―二一

Tel〇五二(九三二)六二二二

西牟田伸一 (昭和四七年卒)

新勤務先 〒一〇〇 千代田区丸の内二―五―二

三菱モンサント化成(株)経営計画室

Tel〇三(二八三)四五九七

◎会報69号 正誤訂正

頁	箇所	正	誤
2	三段 七行目	先蹤	先従
2	三段 終より三行目	木暮	小暮

昭和61年度 決算

I. 一般会計

収支計算書 (昭和61年6月1日～昭和62年5月31日) (円)

支 出	金 額	収 入	金 額
①会報発刊費	354,500	①納入会費	596,000
②山岳部活動補助	250,000	②雑収入	948
③ " (保険料)	72,600	③前年度より繰越	188,885
④通信・連絡費	51,260		
⑤次年度へ繰越	57,473		
合 計	785,833	合 計	785,833

II. 遭難対策基金

収支状況 (昭和61年6月1日～昭和62年5月31日) (円)

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料	72,600	前年度末基金有高	3,238,758
当年度基金有高	3,510,802	学生保険料 (一般会計)	72,600
		利息収入	72,044
		松木氏寄付	200,000
合 計	3,583,402	合 計	3,583,402

昭和62年度予算 (昭和61年6月1日～昭和62年5月31日)

I. 一般会計

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
①会報発刊費	540,000	①納入会費	1,120,000
②山岳部活動補助	250,000	②雑収入	1,000
③ " (保険料)	90,000	③前年度より繰越	57,473
④通信・連絡費	100,000		
⑤次年度へ繰越	198,473		
合 計	1,178,473	合 計	1,178,473

II. 遭難対策基金

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料	90,000	前年度末基金有高	3,510,802
当年度基金有高	3,570,410	学生保険料 (一般会計)	90,000
		利息収入	59,608
合 計	3,660,410	合 計	3,660,410

会務連絡先 (一九八七年度)

総務幹事 岡部 寛史

日商岩井 エネルギープラント部

Tel〇三(五八八)二六二九

〒一四〇 品川区大井六―一三一―

日商岩井雄心寮

Tel〇三(七七七)〇〇四六

同 安島 孝知

ベイン&Co ジャパン

Tel〇三(五九二)四九一六

〒一六七 杉並区上荻

一―二一―二五

Tel〇三(三九二)五一七九

会計幹事 山本 礼二郎

三井銀行堀留支店

(一九八八年二月より)

Tel〇三(六六一)〇二八一

(助貿易研修センター富士宮研修所

(一九八八年一月まで)

Tel〇五四四(五四)〇二一一

〒二七一 松戸市小根本二三八―

三井銀行松戸寮

Tel〇四七三(六五)七七八九

(年会費納入口座)

・三井銀行堀留支店

口座番号 五一二七〇四二(普通預金)

・郵便振替 東京 二―一六六八七

※名義は「針葉樹会」

保険幹事 宮下 克彦

三井物産厚板貿易部

Tel〇三(二八五)二四六三

〒二七三 船橋市前貝塚二六六―三

三井物産船橋寮

Tel〇四七四(三八)五六九一

(保険料振込先)

・三井銀行三井物産ビル出張所

口座番号 五〇五〇七六五(普通預金)

※名義は「針葉樹会」

会報幹事 引地 真

三菱倉庫国際部中国課

Tel〇三(二七八)六五五〇

〒一六七 杉並区南荻窪

三―二九―二三

三菱倉庫荻窪寮

Tel〇三(三三二)八七六〇

同 米田 篤裕

日本輸出入銀行審査部

Tel〇三(二八七)一二二二

〒一七六 練馬区早宮

一―二四―一七―三〇一

Tel〇三(九九三)七〇六〇

山行幹事 宮下 克彦

(前述保険幹事の項参照)

同 佐藤 活朗

海外経済協力基金 開発第三課

Tel〇三(二一五)一三一一

〒二五一 藤沢市鵠沼東

四―一九―四〇二

Tel〇四六六(二四)三八五〇

❀❀❀ 編集後記 ❀❀❀

皆様のご協力により、年内に会報を発行することが出来ました。次号も新年三月頃にはお届けしたいと思っております。正直言いまして、原稿の集まりは心もとないのですが、最近登られた山の話、山プラスアルファの話など、ご寄稿いただきたくお願いいたします。

いよいよ、雪のたよりも聞かれ、心おどるものもありますが、どうぞお体大切に。そして、来年もすばらしき年となります様に。

(米田篤裕)

